詩集

震災の現場に寄り添って

久野雅幸詩集『帽子の時間』

奥付によれば第3詩集。年齢は分からないが、言葉がとても丁寧で、詩としての輪郭がくっきりと鮮やか。帽子をめぐる連作など、アフォリズム調の展開に思想的な奥行きも感じられる。これは詩でしか表現できない世界だと文句なしに感銘を受ける。いわばプロフェッショナルな味わいのある作品群だ。

以下は巻頭の序詩として配されている「アメシスト」の全行。

〈水晶をひろって
棚の上に置いた
透明な水晶なのだが
ある時
紫色に色が変わっている
のぞきこむと
水晶の中に激しく雨が降っている
のだった〉

くの・まさゆき。山形県天童市在住（神戸市北区道場町生野1172の282・空とぶキリン社、1620円）

速水晃詩集『島のいろ―ここは戦場だった』

こちらは奥付に「1945年京都府生まれ」とある上に、40年ぶりぐらいになる第5詩集。沖縄戦の凄惨な状況を、現在著者が暮らしている石垣島に焦点を置いてリアルタイムで描く。

著者は45年生まれだから、直接の体験に依拠しているのではない。膨大な資料を読み込んで、そこに塗り込められた記憶に憑依されるようにして、「ぼく」「私」という一人称で内側から綴った作品群である。とりわけ、沖縄・八重山諸島で猛威をふるった「ヤキー」（マラリア）への恐怖が鮮烈に語られている。

〈戸板にかつがれ
背負われて
動かぬ静かな人が
小屋の前をすぎる
今日　弟の生命が消えた
つぎは　おばぁかもしれない
おかぁかも
妹かも〉

はやみ・あきら。沖縄県石垣市在住（東京都板橋区板橋2の63の4の209・コールサック社、2160円）

安水稔和詩集『春よ　めぐれ』

あの阪神・淡路大震災の日から、震災の現場、復興の現場に寄り添って、20年にわたって書き継がれた著者の膨大な作品から130篇を選んで文庫本としたもの。著者自らが撮影した陰影の深い写真も多数収録されている。出来事の襞、記憶の襞が繊細でありながら広がりのある言葉で織り込まれている。

以下は、書き下ろし作品として収められている「あれは　二十年　二十年」の結び。

〈あれはあなた、あなたがた。
あれはわたし、わたしたち。失われない記憶の印。とだえないいのちの繋がり。わたしたちのなかで生きつづけるあなたがた。あなたがたとともに生きつづけるわたしたち。〉

やすみず・としかず。神戸市在住（大阪市北区中津3の17の5・編集工房ノア、1620円）

（細見和之・詩人）

神戸新聞、2015年1月27日（火）